



## むらの風景が語るもの 世界遺産白川郷を訪ねて

藤永 豪 (COE研究員・PD)

一昨年秋、私は岐阜県白川郷を訪ねた。いわずと知れた合掌造りの家々が集まった世界文化遺産である。茅葺の切妻屋根を冠した大きな民家や納屋、それらが集まった集落景観は実に見事である(写真1)。訪れた多くの人々が、さすがは世界遺産!、と感動するのもうなずける。私も遅ればせながらその感動した1人だ。しかし、その後、目を引かれたのは、集落の中を歩き回る大勢の旅行者の姿であった。もちろん、世界遺産ともなれば、全国的に注目を集め、観光地として発展していくのは当然であろう。実際、集落の脇には立派な駐車場が設置され、マイカーや大型バスに乗った観光客がひっきりなしにやってくる。土産物屋や食堂も大変な賑わいである。しかしながら、集落の中の曲がりくねった細道を練り歩き、家々の軒先を覗き込み、あちらこちらで写真を撮っている彼らの様子を見ると、なにやら不思議な感覚にとらわれる(写真2)。なぜだろうと考えた。そこでふと気付いたのが、地元の人々の姿がほとんど見えないということであった。確かに立派な合掌造りの家々が存在感を持って立っているのだが、そこに生活しているはずのむら人の気配が感じられないのだ。私の違和感の正体はこれであった。無理もない。一歩わが家の玄関を出るとそこにはたくさんの見知らぬ人間がいるのだから。私も集落の

中を歩き回ったが、その途中、裏庭でこっそりと洗濯物を干している女性と目が合った。彼女は次の瞬間には残りの洗濯物を抱えて、いそいそと家の中に隠れてしまった。今日の前に広がる空間は旅行者のものなのだ。しかも、極端にいえば、彼らは合掌造りの民家しか見ていない。もちろん、何をもって、白川郷が世界遺産として登録されたのか、観光の目的は何か、ということを考えれば、合掌造り以外のものにカメラのレンズを向ける必要はないし、私自身何ら疑問はない。

では、むら人たちが生活の場としてきた空間はどこにいったしまったのか。先ほど述べたように家々の裏手には洗濯物がひらめいており、水田には稲刈りの跡と稲干しが見られ、ほんのわずかだが日常の一端が窺えた。そんな集落の人々の動きを目の当たりにしたのは、朝と夕方であった。私は朝早く起き出し、集落の中を回った。早朝6時頃だったが、バインダーの音を響かせ、数人の老人たちがせせせと稲刈りにいそしんでいた。また、集落の外に勤める若いむら人たちが家用車に乗り込み出かけていた。一方、夕方5時過ぎには、観光客のほとんどが姿を消し、下校途中の小中学生や夕飯の材料の買い物帰りなのか、路上で談笑する女性たちの姿が見られるようになった(写真3)。家々の窓には明かりが灯り、数軒の

写真1



合掌造りの家々が建ち並ぶ白川郷

写真2



集落内を散策する観光客

家では未だに薪で風呂を沸かすのか、煙突から白い煙が流れていた。あれほど観光客でごった返していた集落はうのように静かになり、ようやくむら人の手の元に生活空間が返ってきたかのようである。昼間は見ることのできなかつた確かなむら人の生活風景がそこにあった。

このような、ある意味対極的な二つの顔を見せる集落の風景は、われわれに何を示しているのだろうか。むらの風景と空間はまぎれもなく人々が長い生活の歴史の中で築き上げてきた文化の結晶であり、痕跡である。あそこの田んぼはどこそこのじいさんが拓いたとか、あの木は誰が植えたとか、せっかく拓いた田んぼも減反で放棄されてしまったとか、一部の屋根は外から買って来た茅で葺き替えているとか、むらの風景と空間は、住民生活のその時その時の状況を映し出しながら移り変わってきた。そして、今度は観光という波である。世界遺産というブランドに支えられた商品としての風景と空間の提供…。私は決して悪い意味でこのことを捉えているわけではない。言いたいことは、そこに生活してきたむら人が生きるために、おらがむらと暮らしを守るために必死に考えぬき、行動を起こしてきた事実にも目を向けなければならないということである。だからこそ、むら人が集落の中で活動を見せる朝夕と観光客で賑わう昼間の風景のギャップを考えなくてはならない。どちらも真のむらの姿である。過疎化が進み、社会基盤の弱体化が進む現在において、むらの未来を切り開いていくためには、自分たちのむらの文化を商品として、付加価値を付けて外部の人間に提供するのも1つの手段である。駐車場を作り、舗装された遊歩道を整備し、旅行者を呼び込む。同時に、世界遺産に登録したこととその目的からいっても、人類の文化としてのむらの景観を守り、また公開し、世の人々

にその存在意義と価値を問うてもいかねばならない(もちろん、そこにはむら人の誇りも存在するであろう)その結果として、観光という都市の論理が、これまで自分たちだけの空間だったむらの中に入り込んでくるのはやむをえない。しかしながら、自分たちの生活が外部の人間によって支えられている部分があるとしても、すべてを晒すのはおかしい。そんなジレンマがこの集落には見え隠れする(写真4)。観光客の一部には、原風景という言葉を丸飲みしたまま、あたかもそこが最近作られた新しいテーマパークであるかのような錯覚を持ち、そこが実際の生活の場であり、現在も生きるための切実な場でもあることに気づかない者もいる。合掌造りの家にも、当然ながらテレビも冷蔵庫も洗濯機もあり、現在の日本ではどこでも見られる生活が営まれている。軒下には茶色に塗られたパラボナアンテナも付けられている。そして、その生活はわが国の他の農山村と同様に、大半は農林業以外の就業によって支えられている。風景と空間をめぐる旅行者のノスタルジックなまなざしと生活者のリアルな視座、そして、むらを守るための外部への開放と自己保全、これらがせめぎあい、それらが錯綜しながら現在のむらを作り上げている。さらに、そこにはユネスコや行政による遺産の管理・維持という枠組みも覆いかぶさっている。また、観光客が出入りする土産物店や食堂の経営者や従業員にも外部からやって来た人々がいる。実に様々な属性の人間がこの地域と関わっている。

われわれが記録しようとしているのは、このような多様な人々の必死で切実な願いと思いが地表に刻み込まれたむらの風景なのであり、生活にもとづくむらの全体像なのである。

写真3



下校途中の小学生

写真4



玄関先の貼り紙